



「温故」

第十九号

須佐郷土史研究会

温故第十九号発刊について

この文書は、江戸時代後期の安政四年（一八五七）須佐領内漁民の要請に応じて、漁業振興のため試験的に鯨漁が実施された記録文書です。

当時須佐高山沖は、鯨の回遊が見られたので毛利本藩勸農産物係へ歎願し、適地であることが認められ、その許可を得ると共に、鯨漁の先進地である長門市通・瀬戸崎並びに川尻地区漁民の暖かい理解と援助を享受して鯨漁を実施したものです。その期間は一年足らず、漁獲数は六頭ではあったが、種々の手続、苦勞が詳細に記録され、当時の様子を窺い知ることができます。

温故の発行を踏まえ、原文を大きくし余白に釈文例を入れました。ご意見・ご教示をいただければ幸いです。

なお、判読にご協力いただきました須佐古文書を読む会の皆様には格別のご協力を賜り、おかげをもちまして発行の運びとなりました。厚くお礼申し上げます。

二〇〇六年三月

須佐郷土史研究会

## 凡例

漢字は可能な限り原文を記載する。但し、異体字や古体字・ワープロにない字は現行の字に改め、あきらかな誤字は釈文例において訂正した。

者・江・茂・而・定等の助詞は小文字を使用するが、ワープロでは右寄せ機能がないため左寄せとした。(返り点と區別が付かないので、復刻版では全て本文と同じフォントサイズを使用した)  
便宜上、返り点及び続点を付すが、誤記の場合は訂正をお願いする。

表紙は山口県文書館蔵の、防長風土注進案 第一九巻前大津宰判に掲載されている「紫浦にてせし鯨建込の図」を許可を得て利用させていただいた。

## 資料提供

萩市立須佐歴史民俗資料館蔵

## 参考文献

用字用語古文書の読み方(柏書房)

実例古文書判続入門(名著出版)

実例古文書判続演習(名著出版)

安政四年

須佐浦於高山崎ニ為御試鯨組御組建願書  
其外箇屋積り諸入目根積り付建共ニ  
并諸廉荒日記鯨組御發起之大意荒増奥ニ相見候事  
安政四年巳二月

【1頁】

安政四年巳二月

須佐浦於高山崎ニ為御試鯨組御組建願書

其外箇屋積り諸入目根積り付建共ニ

并諸廉荒日記鯨組御發起之大意荒増奥ニ相見候事

【2頁】

一筆致ニ啓上ニ候、然ハ其御地須ニおい而、當春

川尻鯨組を以御試漁之儀ニ付との御事ニ而其段

御願申出置候一付、被ニ差免ニ候ハ、惣階六艘、追船



御年寄

天野清九郎殿

同

齊藤正左衛門殿

儀定

一、三月十日川尻出船、須佐浦着船之節ハ

一應不<sub>レ</sub>残滞船ニ而鯨漁吉日初仕方相調候事、

【6頁】

一、於<sub>二</sub>尾浦<sub>一</sub>漁事有<sub>レ</sub>之候共、須佐江初漁漕廻し

於<sub>二</sub>須佐<sub>一</sub>賣払之事、

一、於<sub>二</sub>尾浦<sub>一</sub>鯨漁事有<sub>レ</sub>之候共、吉本替<sub>二</sub>て須佐江

漕廻し同断、

一、須佐浦鯨漁事之儀者不<sub>レ</sub>残同断、

以上、

右之廉々内談申合、前書之通り双方書替し

相違無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>、仍而一札如<sub>レ</sub>件、

【7頁】

安政四年巳二月

川尻年寄

齊藤正左衛門

同

天野清九郎

庄屋

大藤平兵衛

須佐浦御庄屋

吉田源右衛門殿

同御年寄

橋本嶋右衛門殿

吉部江之届左之通り、

【8頁】

申上候事

於<sub>二</sub>須佐浦<sub>一</sub>當春川尻鯨組を以御試漁

被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>との御事ニ而其段御願申出置候一付、被<sub>二</sub>差免<sub>一</sub>

候ハ、惣階六艘、追船五艘、人数凡百四拾人

程、當三月十日出船ニ而罷越可<sub>レ</sub>申段川尻浦

御庄屋大藤平兵衛・年寄天野清九郎・同齊藤

正左衛門より申越候一付、御届申上候間、此段宜被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>

御沙汰<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候、已上、

【9頁】

巳二月

須佐浦年寄

嶋右衛門

同浦庄屋

源右衛門

大庄屋勸農御内用懸り

椿 茂兵衛殿

勸農御内用懸り

大谷忠兵衛殿

川尻地下役人より 公儀江願書之扣

左之通り、

【10頁】

御願申上候事

今般、勸農産物御内用

御主意筋二付而者鯨漁

御国益第一之事一付、精々被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>御手<sub>一</sub>度、奥阿武郡須佐浦魚附宜敷場所柄一付、為<sub>二</sub>御試<sub>一</sub>先大津

川尻浦鯨組、三月組上ケ之頃より彼地罷越致<sub>二</sub>漁事<sub>一</sub>候而、地下不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>之儀無<sub>レ</sub>之候ハ、御試之上、右鯨組之儀者永年川尻惱一被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣候一付、地下向

【11頁】

申除見候様厚ク被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候一付、其趣を以浦方

一統江難<sub>レ</sub>有御思召筋申聞候処、彼地罷越

漁事及<sub>二</sub>繁昌<sub>一</sub>候ハ、

公私御為筋地下御救之基一御座候一付、奉<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其旨<sub>一</sub>候段御請申出候間、左之通り御代官所江茂

御届申出候、

覚

一、惣階六艘

【12頁】

一、追船五艘

外一壇追船之儀者於<sub>レ</sub>尔<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>彼之地<sub>二</sub>而漁船<sub>一</sub>

雇立可<sub>レ</sub>仕候事、

一、地下役人・力刺・舟頭・舢子其外惣人数凡百

四拾人

一、御運上本別札銀壹貫目宛御上納可<sub>レ</sub>仕候事、

但白子鯨之儀者川尻行形之通り御運上

除キ被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣候事、

刃 刺…追船の船首に立って鉚を打ち込み敵寒の荒

波に潜って手形包丁をふるって鯨の鼻を切り、大剣をふるって鯨をさいなむ、生命をかけたの職掌である。

御運上…漁人に課した税。鯨一本に賦課された。白子鯨…鯨の子供。

【13頁】

一、漁事御試被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候一付而者須佐浦鯨組之儀者

永年川尻浦惱一被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣段地下中

一統難<sub>レ</sub>有奉<sub>レ</sub>存候事、

右今般産物御取建被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候処、鯨漁之儀者

御国益第一一付、精々被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>御手<sub>一</sub>旨御儀一御座候処、

奥阿武郡宰判須佐浦至而魚附宜敷場所

柄之由一付、為<sub>二</sub>御試<sub>一</sub>先大津御宰判川尻浦

鯨組を以、當巳三月網揚頃より彼地罷越懸合之

川尻浦惱…川尻浦において取締まること

【14頁】

諸道具を以相試候而者如何可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之哉、地下不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>之儀

無<sub>レ</sub>之候ハ、地下向申<sub>レ</sub>偷<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>様<sub>レ</sub>勸<sub>レ</sub>農<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>役<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>より

被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>御念<sub>一</sub>、厚御授被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候との御事、難<sub>レ</sub>有奉<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其旨<sub>一</sub>候、早速地下向<sub>示</sub>談仕、彼地網代、魚附等見合として地下役人代并漁人切者之者差越、委敷詮議仕候処、網代式ケ所有<sub>レ</sub>之、尚通魚多旁宜敷場所一相見組立仕候ハ、相應之漁事可<sub>レ</sub>仕、左候得ハ第一

網代…鯨の良く通る漁場。  
切者…強力なもの。役立つもの。

【15頁】

御国益下御救恵之御事二付、何卒聊成共

御国恩奉<sub>レ</sub>報度、浦中熟和之上前書之仕法立

二して、當巳三月十日より當春一限り、彼地罷越度

段御請申出候、尤當浦之儀者往昔より鯨漁一筋

二而渡世仕来申候二付、前断之頃より不<sub>レ</sub>残組揚仕而ハ

春漁第一之所柄二付、漁事取外し候而ハ御仕入

銀尚古借道付等茂相調兼、其上浦人不<sub>レ</sub>残他出

仕、留守中差懸り御役目、火用心其外差添多ク

御座候二付、乍恐前書之通り差向候儀一御座候間、

古借…古代からの借金

【16頁】

旁之趣被<sub>二</sub>聞召上<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>

御許容<sub>二</sub>被<sub>レ</sub>遣候様奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候、此段宜敷被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候、以上、

安政四巳二月

川尻年寄

齊藤正左衛門

同

天野清九郎

庄屋

大藤平兵衛

大庄屋

齊藤源治右衛門殿

【17頁】

前書之通り申出、地下折合旁相違無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>候間、

願之通り被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>遣候様宜敷被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣候、

已上、

同日

大庄屋

齊藤源治右衛門

田中直之丞殿

右先大津川尻浦鯨組、當春於<sub>二</sub>須佐浦<sub>一</sub>漁事

御試被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候仕法立、前書之通り御座候間、被<sub>二</sub>

【18頁】

聞召届<sub>二</sub>漁事相成候様奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候、此段宜敷被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>

御沙汰<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣候、以上、

安政四巳二月

勸農産物御内用懸り

齊藤源右衛門

同

齊藤源二右衛門

田村吉右衛門殿

神田九郎右衛門殿

【19頁】

定徳銀目安

一、徳銀高百貫目定

但白子鯨を除、本魚別御運上札銀壹貫目

(益田家三十三代親施)

益弾正様御屋敷御備銀、本魚別三百目

須佐浦江、本別式百目并懸り之者御心附

其外本別入用之物二、且組立仕入銀賃、

飯米等御入目辻、取得鯨代銀之内二而引残

(通カ)

御算用、一紙之外徳銀高百貫目之高二して

徳銀…利益金。もうけたお金。

【20頁】

目安相定、左之通り割封被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣候事、

内

式拾貫目定

但浦打銀、褒美銀其外入用引當テ、

四拾貫目定

但川尻根組江對し請方被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候分、

以上、

残り四拾貫目定

御徳用

【21頁】

但御仕入銀江對し相備候分、

右先大津川尻浦鯨組、奥阿武郡須佐浦二

おいて、當春漁事為<sub>レ</sub>御試<sub>レ</sub>罷越候一符、已來徳銀

割方申談地下折合、前書之通り御座候間、此段被<sub>レ</sub>

聞召届<sub>レ</sub>宜被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>御沙汰<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣候、已上、

安政四巳二月

勸農産物御内用懸り

齊藤源右衛門

同

(治)

齊藤源二右衛門

【22頁】

田村吉右衛門殿

神田九郎右衛門殿

覚

一、銀式百四拾目定

但沖合親仁(おやし)式人、人別賃銀百式拾目

宛<sub>二</sub>して右之辻、

一、同六百四拾目定

沖合親仁…最高責任者。采幣をふるい指揮をとる者

【23頁】

但刃刺五人、臚押三人共<sub>二</sub>以上八人同断

八拾目宛<sub>二</sub>ア右之辻、

一、同八貫八百八拾目定

但惣階舸子六拾人、追船持相船舸子(モツソウ)

四拾七人、沖切式人、魚見式人共ニ以上百

拾壹人、日数五拾日、日別壹人壹匁六分宛

ニして右之辻、

一、同式百目定

艫押...船の後尾で櫓漕ぎの役をする者

惣階舸子...網積船の船のり。船頭。

持相船...射止めた鯨を二艘の船で抱いて浜へ帰る船のこと。

沖切...本部の指揮者。見晴らしの良い所に詰め旗や吹流して海上の鯨船に合図する。

魚見...一段高い山より沖を通過する鯨を発見し本部に通報する役目。

【24頁】

但単筒持五人、日数同断、日別八分宛ニして

右之辻、

一、同壹貫四百目定

但鯨場毎日諸用達人拾四人、日数同断、

日別式匁宛ニして右之辻、

一、同五貫八百三拾三匁三分三厘定

但惣人数百四拾人、日別飯米壹升宛ニして

壹日分壹石四斗、日数五拾日江當ル分

単筒持...十三才から一人前になるまでの少年で追船舟に二人あて配置され諸道具の保管・手入れ。

組事務所の小使

【25頁】

七拾石引當テ、和市壹石式斗替ニして

右之辻、

一、同式貫目定

但鯨巻揚網惣階同断、入用扱芋代

并神楽山仕調入目共ニ引當右之辻、

一、同五百目定

但地沖入用薪代引當テ之分、

一、同三百目定

芋代（あからむし）方言ではしろう。麻に似た皮で糸を作る材料代

【26頁】

但諸宿灯油并明松、蠟燭代引當

右之辻、

一、同五百目定

但鯨取得之節相圖之采幣入用小杉（まき）

紙、木綿代并諸船小々取繕入目組（少）

揃、神酒代共ニ引當右之辻、

一、同式百目定

但諸役人出宿家賃其外引當テ



采幣…指揮を振る具

【27頁】

右之辻、

一、同式百目定

但鯨取惱道具其外積越船賃

之分右之辻、

一、同五貫目定

但網其外諸道具江被為對一ツ書之通り、

仕戾料と被立遣候様奉願上候事、

一、同壹貫四百目定

【28頁】

但須佐浦鯨網代場所見合地下

役人代、漁人切者差越海底掛探

入用之總持連夫、漁人其外賃賄

代、地下役人代、御心附并御用一疋、鯨組

頭取、勸農御内用掛り等追々出萩

滞留中賄代、連夫賃銀共一引當テ

右之辻、

以上式拾七貫貳百九拾三匁三分三厘定

【29頁】

右當巳ノ春、奥阿武郡須佐浦江先大津川尻

鯨組を以為御試漁・被仰付候一疋、諸御入目前積

前書之通り御座候、正仕詰之儀者組上ケ之節御算用

一紙調上ケ可申候、此辻を以御銀御下渡被仰付可被遣候、

此段宜被成御沙汰可被遣候、以上、

安政四巳二月

勸農産物御内用掛り

齊藤源右衛門

同浴

齊藤源二右衛門

【30頁】

田村吉右衛門殿

神田九郎右衛門殿

梁行三間桁行八間納屋壹棟、石居

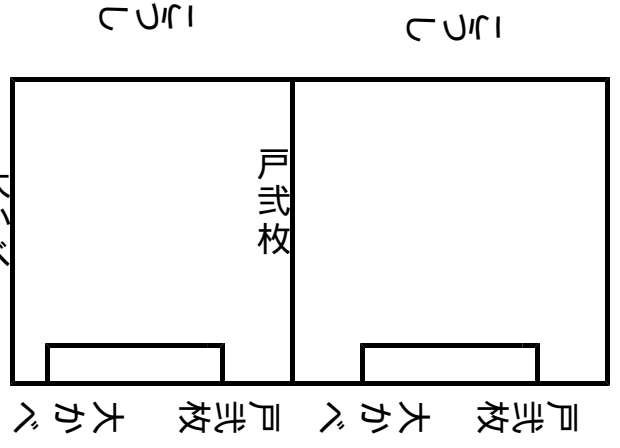
(じふく)地覆立、大壁裏戾しすさりかくし、

勝手瓦葺、戸前式ケ所、仕切共二

戸六枚仕調之事、

【31頁】

梁行三間



梁行三間 圖

【33頁】

一、松角九本定

同

（長八尺  
五寸角

此才数百三拾八才

一、同拾六本定

茂屋軒

（長式間  
五寸角

此才数四百才

一、同拾七本定

短木

（長卷間半  
四寸五歩角

此才数百五拾八才

一、同三本定

鴨居

（長八尺  
五寸二九寸角

此才数八拾三才

【34頁】

一、同七本定

貫軒

（長式間  
四寸二七尺

此才数貳百八拾才

一、同拾三本定

垂木軒

（長式間  
四寸五歩壹尺

此才数五百八拾五才

一、同式本定

敷座

（長式間  
五寸二七寸

此才数七拾才

一、同三本定

格子部貫共二

（長卷間  
五寸二卷尺

此才数七拾五才

一、同丸九本定

梁

（長三間  
末口七寸

此才数六百六拾壹才

一、同拾貳本定

桁棟木

（長式間  
五寸二六寸角

此才数三百六拾才

一、同拾三本定

地覆

（長式間  
五寸角

此才数三百貳拾五才

一、松角四拾八本定

柱

（長卷間半  
四寸五歩角

此才数七百貳拾九才

【35頁】

一、同四本定

格子かまち

（長卷間  
五寸二九寸

此才数九拾才

一、同三本定

付敷居

（長式間  
五寸角

此才数七拾五才

一、同三本定

戸道具

（長式間  
四寸五歩九寸

此才数六拾才

才数四千百八拾九才

【36頁】

一、銀八百三拾七匁八分定

但右才数壹才二付式分宛二七て

一、同拾四匁定

但四歩板三坪半、壹坪一付四匁宛

一、同百四拾目定

但素結竹七百本、壹本一付式分宛

一、同六拾目定

但えつり押ぶち竹百本、壹本一付六分宛

【37頁】

一、同三拾目六分定

但五寸釘四百八本、壹本一付七厘五毛宛

一、同六匁六分定

但大四寸釘百三拾式本、壹本一付五厘宛

一、同拾式匁定

但四寸釘四百本、壹本一付三厘宛二七て

一、同拾式匁定

但大式寸釘八百本、壹本一付壹分五厘宛

【38頁】

一、同六匁四分定

但桧皮釘百六拾本、壹本一付四厘宛

一、同七匁式分定

但小式寸釘七百式拾本、壹本一付壹厘宛

一、同三匁七分五厘定

但大五寸釘三拾本、壹本一付壹分式厘五毛宛

一、同拾三匁式分定

但瓦釘三百三拾本、壹本一付四厘宛

【39頁】

一、同式拾九匁六分定

但土居簀こも七拾四枚、壹枚一付四分宛

一、同式拾四匁定

但縄四拾束、壹束一付六分宛

一、同六百四拾目定

但瓦数三千式百枚、壹枚一付式分宛

一、同式百四拾目定

但壁瓦土共二八百荷、耆荷一付畠土代共二三分宛

【40頁】

一、同四匁定

但すさりわら八、耆一付五分宛

一、同百五拾目定

但あら石居調大側式拾式間仕切三間共二、

耆間一付六匁宛

一、同七拾式匁定

但建調平日用三拾六人、耆人一付式匁宛

一、同百目定

【41頁】

但素結壁裏戻しすさりかくし迄左官

四拾人、耆人一付式匁五分宛

一、同八拾目定

但同断手子日用四拾人、耆人一付式匁宛

一、同九拾目定

但屋根土居葺より瓦葺調迄左官手子

共三拾六人、耆人一付式匁五分宛

一、同六拾六匁定

【42頁】

但屋根仕廻道懸道具借戻し大工手子

三拾三人、耆人一付式匁宛

一、同式百八拾目定

但大工百拾式人、耆人一付式匁五分宛

一、同八拾目定

但貫たる木戸道具挽調木挽三拾式人、

耆人一付同断

式貫九百九拾九匁耆分五厘二

【43頁】

居箇屋三間一拾式間丸木柱堀立造り、

屋根わら葺大側仕切共一貫三通り入二、

壁裏戻し、座六歩板、なげ敷板戸六枚、

竹格子六間共一任調



【46頁】

一、銀百弍拾目定

但柱四拾本、長巻丈末口四寸五歩、巻本一付三匁宛

一、同四拾九匁定

但梁七本、長三間末口四寸五歩、巻本一付七匁宛

一、同四拾八匁定

但桁拾弍本、長弍間末口同断、巻本一付四匁宛

一、同七拾三匁分定

但貫六拾巻枚、長弍間九歩懸二、四寸巻枚一付巻匁分宛

【47頁】

一、同七拾弍匁定

但大床拾八本、長弍間末口五寸、巻本一付四匁宛

一、同六拾目定

但ねた百弍拾本、巻本一付五分宛

一、同拾三匁分定

但間柱三拾三本、巻本一付四分宛

一、同六拾目定

但宇立弍拾四本、巻本一付弍匁五分宛

【48頁】

一、同九拾七匁分定

但たる木弍百十六本、巻本一付四分五厘宛

一、同五拾七匁分定

但屋中竹九拾六本、巻本一付六分宛

一、同拾六匁八分定

但えつり竹弍拾八本、巻本一付六分宛

一、同弍拾八匁八分定

但とごほこ竹弍百四拾本、巻本一付巻分弍厘宛

【49頁】

一、同百四拾四匁定

但屋根坪四拾八坪、巻坪一付葺わら六匁宛二匁

弍百八拾八匁、巻一付五分宛

一、同巻匁五分定

但すさりわら三匁、巻一付同断

一、同拾四匁四分定

但壁小前屋根縄弍拾四束、巻束一付

六分宛

【50頁】

一、同拾弍匁定

但敷居拾弍丁、巻丁一付巻匁宛

一、同五拾四匁定

但戸六枚、壹枚一付九匁宛

一、同百八匁定

但六步板廿七坪、壹坪一付四匁宛

一、同拾壹匁貳分五厘定

但五寸釘百五拾本、壹本一付七厘五毛宛

【51頁】

一、同八匁七分定

但貳寸釘五百八拾本、壹本一付壹分五厘宛

一、同三匁六分定

但四寸釘百貳拾本、壹本一付三厘宛

一、同拾壹匁貳分五厘定

但五寸釘百五拾本、壹本一付七厘五毛宛

一、同三拾六匁定

但貳寸釘貳千四百本、壹本一付壹厘五毛宛

【52頁】

一、同八拾貳匁五分定

但土貳百七拾五荷、持賃畠土代共二、壹荷一付

三分宛

一、同七拾貳匁定

但建調之節平日用三拾六人、壹人二付

貳匁宛

一、同百貳拾八匁定

但壁仕調平日用六拾四人、壹人二付同斷

【53頁】

一、同百八拾目定

但屋根葺手子共二七拾貳人、壹人二付貳匁

五分宛

一、同百八拾目定

但大工七拾貳人、壹人二付貳匁五分宛

銀壹貫七百四拾三匁定

右壹棟仕調御入目之分、

【54頁】

一、居箇屋壹棟

但三間一搭貳間之分、

銀壹貫七百四拾三匁定

但仕調御入目小割、前一同斷、

右三廉、須佐浦之内尾浦江仕調之事、

一、居箇屋壹棟

但三間一搦式間之分、

銀壹貫七百四拾三匁定

【55頁】

但仕調御入目小割、前一同断、

右須佐浦之内水海江仕調之事、

合八貫貳百貳拾八匁分五厘定

右此度須佐浦於高山崎為御試鯨組

御組立就被仰付、納屋壹軒、居箇屋三軒仕調

御入目積小詰詮議仕、前書之通り御座候、已上、

【56頁】

須佐浦年寄

嶋右衛門

同浦庄屋

源右衛門

右前書之通り御入目積委敷詮議仕候処、

相違無御座候、已上、

同日

勸農御内用掛り

椿 茂兵衛

同

大谷忠兵衛

【57頁】

覚

一、銀八貫貳百貳拾八匁分五厘

但梁行三間桁行八間之納屋

三棟、拾貳間之居箇屋三軒共仕

調御入目積り、別紙小割帳之處

一、同五百五拾目

但納屋、居箇屋仕調一疋、せり迄

【58頁】

并漁事組上迄引受役付之者

見廻り出勤并御用一疋、勸農御

内用懸り其外追々出萩、賄代

連夫賃銀共引當右之辻、

八貫七百七拾八匁分五厘

右奥阿武郡須佐浦高山崎之儀八先年より

鯨組被差免候儀有之候處、此度勸農産物

【59頁】

御内用御詮議之段有之、先大津御宰判

川尻浦より為御試入漁組立就被仰付、去

十二月下旬より魚見之者罷越、追々見合

仕候處、通り鯨多御座候一疋、彼地勸農

御内用懸り申談仕、三月十日罷越

網入仕候約定御座候、右網代之場所より



風相寄、須佐元浦江漕廻し又者尾浦へ

【60頁】

漕廻し候様一茂罷成、尤尾浦之儀者端浦之儀一付不自由勝御座候一付、

納屋老軒、居箇屋式軒相調、須佐元浦

之儀ハ居箇屋老軒相調、其余納屋等之

儀ハ借り上ニ先相濟せ可申段、篤与

及三示談仕調、御入目積り小詰詮議仕、

尚又引受役付之者出勤二付、諸入目

【61頁】

共前積り前書之通り御座候、正仕詰之儀ハ

追而御算用一紙炯上可<sup>(付)</sup>申上、此辻ヲ以

御銀御下渡被<sup>ニ</sup>仰付<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>遣候様、此段宜様

被<sup>レ</sup>成<sup>ニ</sup>御沙汰<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>遣候、以上、

巳ノ二月

勸農産物御内用懸り

椿 茂兵衛

同

大谷忠兵衛

【62頁】

田村吉右衛門殿

神田九郎右衛門殿

【63頁】

吉部より直飛脚参候 御沙汰状左之通り

須佐浦鯨組一件、先達而源右衛門殿御出

萩、忠兵衛より及<sup>ニ</sup>御示談<sup>ニ</sup>納屋、居箇屋仕調

御入目積願書、過ル七日<sup>(あすかり)</sup>一御内用方江差出

置、村田清左衛門相関置、忠兵衛儀者過ル十一日

致<sup>ニ</sup>歸在<sup>ニ</sup>候處、今朝御呼出有<sup>レ</sup>之、清左衛門罷出

左之通御授有<sup>レ</sup>之候、

一、鯨組被<sup>ニ</sup>差免<sup>ニ</sup>候一付、先大江致<sup>ニ</sup>其沙汰<sup>ニ</sup>

【64頁】

候間、早速箇屋普請取懸り様との御事一

御座候、

但被<sup>ニ</sup>差免<sup>ニ</sup>候御正據物之儀ハ先大江へ<sup>(証拠)</sup>

差下ケ候一付、奥阿武郡江口達ニ而

相授候様との御事一候、

一、納屋、箇屋普請銀之儀ハ追而可<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>

差下<sup>ニ</sup>との御事一御座候、

【65頁】

一、郡棟梁宮内傳五右衛門、昨日致<sup>ニ</sup>歸在<sup>ニ</sup>候由、

右普請仕向之儀可<sup>ニ</sup>仰合<sup>ニ</sup>候、

一、御田屋向御伺旁無<sup>ニ</sup>抜目<sup>ニ</sup>御取計

候様存候、

一、村田清左衛門儀、明日生雲迄帰在可致

筈二付、い曲承り申授度儀も有之候条、

畔頭之内老人、明日生雲へ被差出候

【注】 65頁～66頁の間、原本一頁欠落

【66頁】

候様存候、

右為其態々如此御座候、以上、

勸農御内用懸り

二月十六日

大谷忠兵衛

同

椿 茂兵衛

浦庄屋

源右衛門様

同年寄

嶋右衛門様

【67頁】

御領海御借揚之願書

申上候事

(須佐)

御領分佐浦高山崎之儀者先年より鯨組被差免候儀

も有之候處、此度勸農産物御内用御詮議之趣

有之、先大津御宰判川尻浦より為御試入漁

被仰付度、去十二月下旬より魚見之者罷越、追々

見合仕通り鯨多御座候一付、申合せ候處、三月十日より

罷越網入仕度申事一御座候、右網代之場所より風

相寄、須佐浦江漕廻亦者尾浦江漕廻候様

一毛相成、尤尾浦之儀八端浦之儀二付、不自由勝二

【68頁】

御座候二付、納屋老軒、居固屋式軒相調、須佐浦

之儀八居固屋之儀者借立ニ先相済可申段

及示談申上候間、御領海借り入之儀被遂ニ

御許容被遣候様奉願候、納屋、居固屋他所

材木採用等之儀者浦方御庄屋、年寄より御願

可申出候間、旁之趣被遂ニ御詮議被遣候様、此段宜被

御沙汰可被下候、已上、

二月

勸農方御内用懸り

椿

茂兵衛

大谷忠兵衛

【69頁】

當時裏判役也

有田修平殿

右者御領海御借揚と申事、いつれよりか無之而八御内  
輪

御持方も不宣、吉部より地下尋等者追々段を組沙汰相成

候へ共、夫レ計りニ而御領海江入漁ニ相成候而八甚表向之

御一世不宣一付、其段大庄屋大谷忠兵衛方江兼而之事

故内々浦庄屋よりも申遣候處、右御領海御借揚ケ

之處ハ勸農方より願出可仕段御代官所より授ケ相成候由

一而、前二相見候様一樁茂兵衛・大谷忠兵衛より願書  
差出候

一付、當役中連名之御用状を以萩伺相成候處、願之

通り可被遂御免一段申来り候一付、願書江振り紙

【70頁】

一、御免之沙汰相成候、尤浦庄屋取次一而差出候一付、

裏判座より浦庄屋迄御免之及沙汰候事、

一、鯨網御内輪發起之次第八當時浦方至而不

繁昌一而日一増及難渋候様相見、浦役人共兼々何ぞ

浦方之賑ひ一相成候義をと追々令心配候共、是（おたて）祐と  
申事も

無之、又少し氣付有之候而も當り支りも有之候内、大  
庄屋

大谷忠兵衛共兼而御内輪之處ハ御為筋一相成候様一

取計、至而深切（親切）一任候者一而、彼之者存付一鯨組共御

【71頁】

發被為在候ハと申事も追々有之候共、大銀之事中々  
御内

輪一而相調候義一無之候處、忠兵衛含一者何卒公儀御撫

育より御出銀一而於御領海一右漁事被仰付候様一、御内  
輪

御手入共相成候ハと相含居候趣相聞候共、是以卒直二

申出も不相成、彼是於御内輪も相考候内、於江戸方

御國産之御詮義當時頻り有之、已一石之事よりして

三嶋江鯨組共被差立候様子相聞候一付、去夏御引調  
見嶋

一、いつれも在萩之節申合せ、御國産之御詮義根役

所ハ江戸方一而坪井九左衛門殿懸り一而詮義相成候趣  
一相聞

候一付、彼方之耳一入候様一無咄度（はなし）、去ル方江於領海  
も

鯨組被相立候様一有之候ハと申事申込、尚又當郡御代

【72頁】

官當り江も須佐浦為賑何卒鯨組被相立被下候様一

と追々申込候處、於公儀もいつれも可然と被存候

様子一而、地方御手元役前田孫左衛門殿當りも殊外

心配相成候而其詮義相成候處、何邊於江戸方も新

規一組被相立候と申事ハ大銀之義、當浦沖之處ハ

前々より都合ハ宜敷網代とハ相聞候共、年久敷

現漁も無之處柄一付、為御試一川尻鯨組之内を

半組、當春三月十日、川尻を網揚ケ一被差越

との御詮義一相成候、右御詮義濟迄一者於下段々  
見嶋

彼是と差支りも有之候趣、當浦一者四月中頃一毛

【73頁】

相成参り候様一有之候時ハ復漁之妨一毛可相成一と漁人共

存寄りも有之趣、是以無餘義筋、切又於川尻ハ

彼方之春漁を差置候而當浦江入漁と申處ハ

不折相之趣も有之、所詮事不<sub>レ</sub>り一有之、元來當浦

之處ハ鯨冬漁を第一相望み、左候ハ漁人之常

之漁事之妨一毛無之筋一候處、冬漁ハ尻も

同様之事故一其節彼方之網を揚ケ當浦江入

漁と申事ハ不<sub>レ</sub>相捌、然分<sub>レ</sub>別段ニ於公儀御取立と申

事も急不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>相調色々御詮義相、(いよいよ)弥相縮ル處、當三月

十日、川尻半組網揚ケニア當浦江為試入漁と

申候事相決し候、右一件一付而ハ浦庄屋共先達而

【74頁】

萩罷出数日滞留、折節先大津よりも勸農方

鯨懸り之者も出浮居、當郡一而も大谷忠兵衛罷出居、

追々當浦入漁一付而之諸事申合せ書替し等迄

令心配一候事、

一、去冬より魚見之者追々爰元尾浦當り江参り

居、至極宜敷網代、通り鯨も沢山一有之様子

一而追々事相決し候由一候事、

一、初發之處ハ當浦為鯨組入漁被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候様ニ

と申が大意一候ハ鯨組之者當浦江入込之訊一候處、

尾浦を根之居所一在候様之模様一相聞<sub>レ</sub>候一付、

【75頁】

追々役所よりも及<sub>レ</sub>内詮義、浦庄屋當り於萩も心配せし

め候處、素より根ハ當浦第一之訊一候共、去冬より魚

見之者罷越居現場見合せ候處、春鯨ハ如何可有<sub>レ</sub>

之、冬漁之處ハ尾浦を根ニア居不<sub>レ</sub>申而ハ海上之

(便)弁利不<sub>レ</sub>宜、春漁も趣一寄り候而ハ尾浦より出候而

漁事之便利と申事故一其義ハつれ一而も現漁

を仕候者之便り一在せ不<sub>レ</sub>申而ハ漁事之不<sub>レ</sub>為、夫故ニ

根之居所ハ尾浦と相定メ候外致方無<sub>レ</sub>之申

事一相成候處、何邊夫<sub>レ</sub>而ハ當浦之為方一者成不<sub>レ</sub>申、

却而江崎浦共ハ尾浦江近き處柄一候者、此方ニ

骨折他浦之尻助ケを仕候様一相成、甚以残念

【76頁】

不<sub>レ</sub>相濟一事一付、於萩御屋敷より浦庄屋を以追々

川尻役人之方江及<sub>レ</sub>懸相せり込、元來春之御試ハ

猶更以須佐浦之引受一相成候よりして之御詮義一候ハ

尾浦江ハ固屋懸ケ抔仕須佐浦之方ハ何事も無<sub>レ</sub>之

事一相成候而八根之御詮義之御趣意一不<sub>二</sub>相叶<sub>一</sub>一<sub>二</sub>訳<sub>一</sub>候八  
躰一寄り候而八御領海入漁之處、御断も御内輪より

相成可<sub>レ</sub>申哉と申氣位<sub>二</sub>而追々萩<sub>一</sub>而せり込相成候處、  
いか様於<sub>二</sub>其段<sub>一</sub>八川尻之役人も御尤千万<sub>一</sub>候得共、先ツ  
御試之事一候へ八初メより 公儀御物入之事も難<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>

【77頁】

いつれ冬漁之處八尾浦を根<sub>二</sub>居<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>申而八美<sub>二</sub>

漁事之便利不<sub>レ</sub>宜、左候八當春纔御試之間之處

一於<sub>二</sub>須佐<sub>一</sub>箇懸ケ等仕候而八無益之失墜多候へ八

どの道不<sub>二</sub>相調<sub>一</sub>而<sub>二</sub>不<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>、大浦江箇屋懸ケ之詮議

と申事之由、是以彼方之申分一涯<sub>二</sub>無<sub>一</sub>り共不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申

事一候へ共、何邊當浦を根と申<sub>二</sub>表廻<sub>一</sub>り者不<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>

而八如何<sub>一</sub>付、追々心配相成候而相縮ル處、當浦江

箇屋尅軒懸ケ、尾浦江<sub>二</sub>ケ所<sub>一</sub>、居所八便利<sub>二</sub>

付尾浦<sub>二</sub>居候<sub>一</sub>而も、漁事初鯨八つれ<sub>一</sub>而

取り候而も當浦江漕込、夫レよりムササ之口邊<sub>二</sub>而

取り候分<sub>二</sub>勿論<sub>一</sub>何本<sub>二</sub>而も當浦又尾浦之

【78頁】

手近之沖<sub>二</sub>而取り候<sub>一</sub>鯨も、當浦と尾浦と

尅本替<sub>二</sub>漸折<sub>一</sub>相付候筋八前之書替し規

定書写<sub>二</sub>相見候<sub>一</sub>事、

一、當浦之箇屋八水海橋詰之開作之土地を借

受候事、是<sub>二</sub>勿論<sub>一</sub>鯨組之方より地ちん差出候、常々

預ケ之濱銀八分宜敷様子<sub>二</sub>相聞候<sub>一</sub>事、此借用

之事<sub>二</sub>付<sub>一</sub>而八彼方と浦庄屋との相談相<sub>二</sub>而格別

彼所より之懸り相<sub>二</sub>無<sub>一</sub>之候事、

一、大浦之濱箇屋地之處八浦庄屋より所柄申出、

格別差支り無<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>付<sub>一</sub>、御免相成候事、

【79頁】

(一件)

一、箇屋懸一卷、郡棟梁宮内傳五左衛門江公儀より

御沙汰相成、請負<sub>二</sub>相調候<sub>一</sub>事、

一、當御領海<sub>二</sub>而鯨漁之義<sub>一</sub>八前々より度々有<sub>レ</sub>之、

文政年中<sub>二</sub>も近く御詮義有<sub>レ</sub>之、尤其節八現

漁迄<sub>二</sub>者及不<sub>レ</sub>申候<sub>一</sub>へ共、夫より已前<sub>二</sub>勿論<sub>一</sub>現漁も有<sub>レ</sub>之、

彼是先例も有<sub>レ</sub>之義<sub>二</sub>付<sub>一</sub>、格別川尻、千崎之

鯨組より差支り<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>申出<sub>一</sub>候、近く文政度<sub>二</sub>も地下

尋相成候上<sub>二</sub>而御免<sub>一</sub>八相成候物<sub>二</sub>候<sub>一</sub>、夫故<sub>二</sub>此度<sub>一</sub>八

格別両大津江も地下尋と申事八公儀よりも無<sub>レ</sub>之

【80頁】

様子<sub>二</sub>相聞候<sub>一</sub>事、

一、鯨尅本<sub>二</sub>付<sub>一</sub>、御内輪江御馳走銀三百目之

儀定一候事、

一、浦方江同断二付、式百目之事、

一、鯨組入漁被差免候而、追付罷越候二付而八賣買

物其外浦町共二商人中江沙汰相成候、尤沙汰

書者御役所御扣一相見候、爰一略候事、

【81頁】

御伺申上候事

一、於三須佐浦、尾浦鯨賣拂之節、川尻鯨方

役人、會所二而賣拂可被二仰付二哉之事、

一、同断之節、須佐浦役人為締立會、代銀

廿日切一取立可被二仰付二哉之事、

一、同断二付、心配苦勞江對し漁事之上、相應

之御心附銀被下候様、其節御伺可二申上二候事、

一、鯨賣拂之節、落札主直様諸所江積運

之分者掛物無之、勝手次第賣捌可被二仰付二哉之事、

【82頁】

但下買と諸所より罷越候者之儀者

於三須佐浦、田屋下任二可被二仰付二哉之事、

一、鯨賣拂之節者敷札相調置、自然入札行

届不申節八會所之役人江被二相任二御手惱

被二仰付一、追而徳銀等仕詰申出可被二仰付二哉之事、

一、鯨取得之節八川尻より被二差出一候鯨方役人より

御注進可二申上二候事、

右之廉々御伺申上候間、何分之儀被成二御沙汰

可被遣候、以上、

【83頁】

巳二月

先大津勸農御内用掛り

齊藤源右衛門

奥阿武郡同

椿 茂兵衛

同

大谷 忠兵衛

田村吉右衛門殿

神田九郎右衛門殿

一、當郡御代官より左之通り職座江申来り候事、

付り 承知之返答相成候事、

【84頁】

一筆致三啓達一候、先大津宰判川尻

浦鯨組、於三須佐浦一當春為試鯨

漁被二仰付一候段御沙汰相成候、為二御知達一如斯

御座候、恐惶謹言、



三月

吉崎八郎

益田勘兵衛様

三月十二日

【85頁】

一、鯨組、十日川尻出船二而今十二日朝迄二不<sub>レ</sub>残當浦着、早速於<sub>二</sub>内海<sub>一</sub>鯨漁之仕方相濟候上、直様不<sub>レ</sub>残尾浦江罷越候事、

一、前断二付、御土居より酒三斗被<sub>レ</sub>下候事、

付り

鯨組之内頭立之者五六人相残り居、浦庄屋宅二而御土居より被<sub>レ</sub>差下<sub>一</sub>候御酒頂戴、残り人数八

尾浦江取歸り候事、残り候者八翌日早朝二陸通り大浦江罷越候事、

一、右鯨組、弥罷越候段御用状を以萩申出及<sub>二</sub>

御聞<sub>一</sub>候事、

一、後付之者、十三日二應罷出呉候様二と浦庄屋より申出候

【86頁】

由二而十三日二罷出候事、

一、勸農御内用懸り大谷忠兵衛事、此内出張り居候而、

十三日之朝、浦庄屋同道二而尾浦江参り候事、

一、前二相見候様仕方仕候二付、當役中荒神堂之下より

乗船二而少し押出し、見分せしめ候船江御役之紋を

打せ候事、

一、鯨組入込後八日々通り鯨も有<sub>レ</sub>之候共、所詮否様悪敷

得漁無<sub>レ</sub>之候處、今三月十六日、白子吉本取り候、恵美

之濱江夜半頃一漕付申候、鯨組頭取より白子二而八御座候共、初漁

之事二付、白身吉貫目、赤身吉貫献上仕段願出

【87頁】

候由二而浦庄屋、同年寄りより書付を以裏判迄願出候二付、

爰元二而申合之上、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>御免一段沙汰相成候而差出候、鯨得

漁尚右献上之事願出、於<sub>二</sub>家老<sub>一</sub>申合せ御免之致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>、右鯨

身差出候旁之趣及<sub>二</sub>御聞<sub>一</sub>候様二と御用状を以、此度浦飛(飛脚)

を以萩申出候、鯨身も浦より差出候事、

付り 鯨於<sub>二</sub>沖相<sub>一</sub>取得之段注進有<sub>レ</sub>之段浦庄屋より早速

裏判所江届出候事、此度之分八先五組位二而候事、其後又吉本取り候、是も凡右之太サ位之物一候事、此度者二本切り二而當春之處八相止<sub>二</sub>候事<sub>一</sub>、

【88頁】

一、右鯨組も所詮不漁二而永續不<sub>レ</sub>仕、其後

御内輪浦方之組立二而雇入之筋二而、

吉部方尚御内輪地下其外萩一而

宗像・田村當出銀一而、一ヶ年前大

津組入漁之相談相調罷越候處、

(矢張)  
八張不漁一而是又一ヶ年限り一而

相止候事、御内輪よりも少々御出銀

相成候事、

【89頁】

一、安政五午、冬網より春網迄、

公儀勸農方鯨組入漁被<sub>レ</sub>仰付<sub>二</sub>候事、

付り浦方為方一毛可<sub>レ</sub>相成一符、都合地下

より之願出<sub>二</sub>候共、御内輪よりも入漁之  
義者内演説を以勸農方江被<sub>レ</sub>仰入<sub>一</sub>

相成相調候事、

一、此年大小六本得漁有<sub>レ</sub>之候事、

一、翌六年冬より引續入漁之事、

此年者

【注】 89頁〜90頁の間、原本一頁欠落

【90頁】

覚

川尻庄屋格浦年寄

天野清九郎

右川尻鯨組於<sub>二</sub>須佐浦<sub>一</sub>御試と<sub>レ</sub>

入漁一符、組方諸締り取得

鯨賣捌旁頭取申付候条、精<sub>(誠)</sub>

実可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>所勤<sub>一</sub>候事、

鯨方年寄地下横目

卯左衛門

地下横目網頭

大中松右衛門

右同断一符、組方諸道具締り

其外年寄役之心得を以

極番一<sub>(誠)</sub>精実可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>所勤<sub>一</sub>候事、

【91頁】

御代官所より沙汰書之写し

覚

一、瀬戸崎鯨組雇之儀

願出之通被<sub>二</sub>差免<sub>一</sub>、来ル

三日須佐浦入込候上者

鯨組頭取其外之者

申合、諸事無<sub>二</sub>隔意<sub>一</sub>

可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>其節<sub>一</sub>候事、

一、鯨漁一件米銀請拂

帳相調置、両浦鯨組

役人中存之手子之者



見届、印形<sub>レ</sub>り仕置網  
上ケ惣勘定一紙相調、

【92頁】

御代官所差出可<sub>レ</sub>申候事、

一、鯨取得之節、即刻飛

脚を以可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>注進<sub>一</sub>候事、

但し注進書状御代官、御

勘定役、筆者役江、

鯨方惣頭取其外

三人之者より直當テ<sub>二</sub>、

濱崎鯨問屋迄無<sub>二</sub>

遲滞<sub>一</sub>差出可<sub>レ</sub>申候事、

一、右同断、献上之儀者須佐

浦鯨方役人出萩可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>

其節<sub>一</sub>候事、

一、右同断、入札賣其外

前後取捌方之儀別

【93頁】

紙申談書之通雙方

書面取替置可<sub>レ</sub>申候事、

一、鯨組漁人船子等之内、

他國者多人数入込

之事<sub>一</sub>付、御國法

相守喧嘩、口論無<sub>レ</sub>之

様諸事可<sub>レ</sub>念<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>候事、  
(可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>念<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>カ)

但他國者之儀者国所

現名付立可<sub>二</sub>申出<sub>一</sub>候事、

【94頁】

右之通相心得瀬戸崎

浦組方之者申合可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>其

節<sub>一</sub>候、尚組建諸入

目米銀小積を以彼

浦其申出之分正仕詰

初定立、双方申合後

煩無<sub>レ</sub>之様取計可<sub>レ</sub>申、此

余難<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>落着<sub>一</sub>儀毛有<sub>レ</sub>

之候ハ、廉書を以可<sub>二</sub>申

出<sub>一</sub>候事、

午二月